

学術誌「野生復帰」の船出

編集委員長 江崎保男

The departure of “Reintroduction”

Yasuo Ezaki

Editor-in-chief

本誌は「野生復帰 Reintroduction」と題す。前世紀の末から世界・国・地域レベルで多くのレッドデータブックがつくられるようになった。そして今や、絶滅の危機に瀕する生物たちを、一時的にケージや水槽や苗床でストックし、時がきたら再び野外に戻すという行為が必要不可欠になった。そしてこの行為は一般的に「たねの保存→環境整備→野生復帰」というプロセスをへて行なわれる。

環境とは「主体をとりまくもの」であり、人を含む生物からみると、他人や他の生物も環境である。だから野生復帰は、地学や生物学に代表される自然科学だけではできない。人の社会・経済・歴史・文化に関する広い知見・学問・見識も必要である。また、そもそも人も生物も、海洋を含めた広い意味の大地の上で、これに依存しながらも互いの複雑な相互作用のなかで長い年月をかけて進化してきたものであるから、その生活には人の営為を含めた地球の自然のすべての要素がかかわっていると考えて間違いない。そこで当然のように、本誌に掲載する論文や報告は学問分野を問わない、また技術に関する報告も大歓迎である。

20世紀において科学は大きな発展を遂げた。しかし、発展は専門分野の一人歩きという弊害を必ずともなう。学問の縦割り構造ができあがり、より専門に特化した緻密なものこそが良いという風潮が広がり、広い視野をもった研究が敬遠される傾向さえ時として生まれる。野生復帰はそれでは達成できない。そこで、本誌は野生復帰あるいはこれに関係する広い課題を分野横断あるいは分野連携で取り扱うことをねらいとする。

ところで、野生復帰は一般的にアダプティブ・マネジメントの手法をもちいて行なわざるをえない性質のものである。野生絶滅あるいは絶滅危惧に至る以前の健全な個体群についての科学的な生態情報がない事がままあるからである。そこで科学に基づいた目標を立て、試験的な導入により形成される野外個体群のモニタリングや環境整備を含めたさまざまな実験の試みの結果を科学的に評価し、これをフィードバックして、より実効的な手法により野生復帰を進める。目標達成までこのことを繰り返す。それがアダプティブ・マネジメントである。

本誌の編集もアダプティブ・マネジメントの手法をもちいて行なう所存である。分野横断と分野連携、果ては分野統合という理想を追いたいからである。年を追うごとに雑誌の内容も体裁も、この雑誌が担うべき機能にあわせてどんどん進化していくことを切に望むものである。